

草地適用型囲いわなによるエゾシカの捕獲（北海道）

- 北海道では、令和2年度にエゾシカによる農林業被害が40.7億円に達し、そのうち約4割が牧草被害
- 牧草被害を低減するためには、エゾシカを非積雪期の牧草地で直接捕獲することが効果的
- 「草地適用型囲いわな」を新たに開発、捕獲試験を実施した結果、捕獲実績が向上し、牧草被害額が低減

取組内容

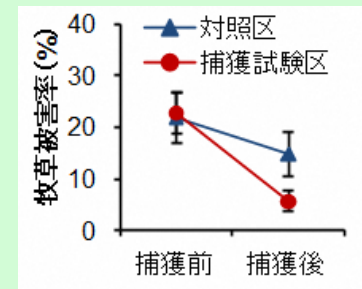
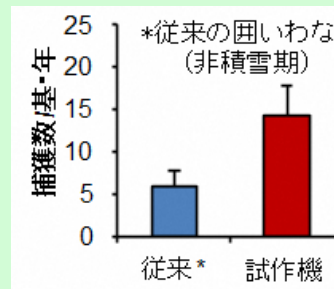
- 従来の囲いわなは、エゾシカを誘引しやすい積雪期に適したものであるため、非積雪期の捕獲には不向き
- 非積雪期の牧草地に適した「草地適用型囲いわな」を新たに開発



- 囲いわなの試作機を制作し、平成30年～令和2年に捕獲試験を実施

成果

- 従来の囲いわなには無かった4つの特徴を有する試作機を製作
 - ①ゲートまでの誘導部がある
 - ②入口が大きい連結式のゲート部
 - ③通路型の構造
 - ④牧草ロールを利用した囲い部
- 試験地における捕獲試験の結果、従来の囲いわなに比べて2倍以上の捕獲実績を上げること成功。また、捕獲試験前年と比べ、牧草被害量の割合が減少し、被害額も低減



草地適用型囲いわなによるエゾシカの捕獲(北海道)

きっかけ・背景

- 北海道ではエゾシカによる甚大な牧草被害が発生
- エゾシカは非積雪期の夜間に牧草地へ出没するため、銃での対応が困難

課題

- 従来の囲いわなは、餌の乏しい冬期に捕獲することが前提
- 非積雪期の牧草地に適した囲いわなが無い

Step1 構造の検討

- エゾシカができるだけ警戒しにくい構造が必要
- 牧草地という環境下でも運用しやすい資材を利用することも必要

Step2 試作機の制作

- 新たな4つの特徴を持つ試作機を制作
 - ①ゲートまでの誘導部
 - ②入口が大きい連結式ゲート部
 - ③通路型の構造
 - ④牧草ロールを利用した囲い部

① ゲートまでの誘導部

電気柵を漏斗状に設置すると、出入口のシカ通過頻度が上昇

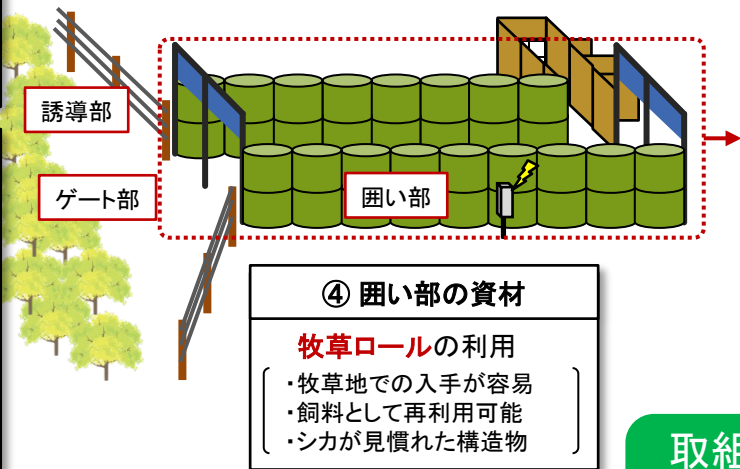
② 入口が大きいゲート部

幅の広いゲートはシカの警戒心低減に有効



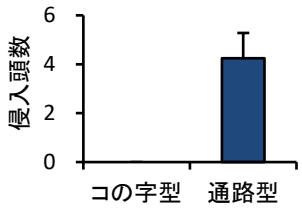
連結可能な構造
従来よりも広い入口

草地適用型囲いわなの特徴



③ 通路型の構造

見通しのよい通路型構造はシカが侵入しやすい



Step3 捕獲試験の実施

- 自動撮影カメラによるエゾシカの出没情報をもとに捕獲場所と捕獲時期を選定
- 餌による誘引試験を実施
- 捕獲実行のタイミングを検証
- 上記を踏まえ、試作機による捕獲試験を実施

取組の特色

- エゾシカの警戒心に配慮することによって、非積雪期の牧草地で捕獲できる囲いわなを開発
- 資材に牧草地の生産物(牧草ロール)を活用可能
- 囲いわなで捕獲されたエゾシカは、一時養鹿が可能であるため、肉質の安定化や衛生的な処理が可能となり、ジビエによる地域振興にも貢献可能

取組による成果・効果

- 平成30年～令和2年の浜頓別町、標津町、白糠町の3町における5機の試作機による捕獲試験の結果、各試作機ごとに年間2～18.5頭のエゾシカを捕獲
- うち3機は、非積雪期を中心に運用された従来の囲いわなの平均捕獲数を大きく上回るとともに、捕獲の翌年には牧草被害量が約15%低減

今後

- 草地適用型囲いわなは、従来の囲いわなに比べて、非積雪期に効果的な被害低減が期待されるため、草地地帯への普及を図る